

エッジコーティックス、デバイス上で動くA I 技術開発

2025/04/15 18:28 日本経済新聞電子版 589文字

半導体の設計開発を手掛けるスタートアップ、エッジコーティックス（東京・中央）は15日、人工知能（A I）搭載ロボットなどを想定した技術を公開した。A I がデバイス上で動くのが特徴で、応答精度が高まり、消費電力は低くなる。

同日都内で開かれたA I 技術の展示会でのデモでは、デバイス搭載のA I がネットにつながずに、チャット上で利用者の質問に答えたり、カメラに写った来場者の服装や動作を描写したりしていた。米グーグル出身の研究者らが日本で設立した新興企業、サカナAI（東京・港）による小規模言語モデル（SLM）「TinySwallow」を搭載。使用電力は最大7ワット以下で、エヌビディアの画像処理半導体（G P U）と比べ消費電力は5分の1以下に抑えられるという。



開発した技術を説明するエッジコーティックスのダスグプタC E O（15日、東京都江東区）

サキャシंगा・ダスグプタ最高経営責任者（C E O）は「汎用的な用途ではなく、工場など限定されたシーンでの使用で実用化に向いている」と説明する。今後はA I の精度や使用者からみた使い勝手を改善する。

エッジコーティックスは2019年に設立された。半導体チップを動かすソフトウェアの設計技術に強みを持ち、ルネサスエレクトロニクスなどが出資している。ダスグプタ氏は米I B Mや理化学研究所で研究開発を経験してきた。回路線幅6ナノ（ナノは10億分の1）メートル以下のより高度なA I 半導体を26年にも開発し次世代インフラ向けに販売する計画を進める。

許諾番号30103386 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.